

日本語教育

大島 中正

2013年1月から2015年12月までの3年間において特筆すべきテーマは「やさしい日本語」であろう。研究と実践の両面において充実してきている。

ウェブ上で「やさしい日本語」によるニュース、NEWS Web Easyが本格的に提供されるようになった。「普通のニュース」とその「やさしい日本語」版とが提供されているため、利用者は両者を比較して、表現上の種々の差異をすることができる。

この3年間に公刊された書籍、雑誌としては、下記の①～③が主要なものである。

- ①庵功雄、イ・ヨンスク、森篤嗣 (2013.10)『「やさしい日本語」は何を目指すか多文化共生社会を実現するために』ココ出版
- ②日本語教育学会 (2014.8)『日本語教育 特集「やさしい日本語」の諸相』158号
- ③公益財団法人日本のローマ字社 (2015.10)『ことばと文字 特集「やさしい日本語」の研究動向と日本語教育の新展開』4号

ここでは、湯浅千映子氏の研究をとりあげる。湯浅 (2014.10)『「やさしい日本語」に見る言い換え操作—語句交替の形式に着目して—』神奈川大学経営学部『国際経営論集』48号は、愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室の『やさしい日本語の手引き』等を資料として、「やさしい日本語」が、「一般向け」に書かれた文

章と比較すると、和語に重みのかかった表現であること(例：不通→使えない、動いていない。倒壊する、破損する→壊れる)を明らかにしている。「やさしい日本語」ばかりでなく、小学生新聞などを言語資料として、受容者の差異に応じた表現の類型についての研究を、長年すすめてこられた湯浅氏の研究成果がまとまった形で公刊されることが期待される。林四郎氏は、かつて、井上ひさし氏との対談(「ことばの表現力」『國文學—解釈と教材の研究—』29巻6号)の中で、日本人が「どの方面へも発展するような本源的なことばを使ってじっと考えようと思う時には、和語でないと頼れない」と感じると発言されている。和語は「やさしい」とは、日本語母語話者の錯覚にすぎないのかもしれない。湯浅 (2014: 154)も指摘するように、「やさしい日本語」の「やさしい」とは、あくまでも製作者である日本人が考えるやさしさであって、在住外国人が「やさしい」と感じるか否かは、定かではないと、まずは考えるべきであろう。

「やさしい日本語」は、「日本語人」(田中克彦2011『漢字が日本語をほろぼす』角川SSC新書126を参照)全員の問題である。日本語非母語話者のみならず、日本語母語話者にとっても、平明にして達意の文体であるべく、みがかれていくことが望ましかろう。表現学の立場からは、言文一致の文体の問題としてとらえることができるだろう。あるいは「やさしい日本語」に対する日本語人の態度や評価のありようは、表現論説史上の問題として考究することが可能であろう。(同志社女子大学)